桜町

平安時代中期の偉大な歌人、紀貫之がこの地に住んでいたと言われています。敷地内には数多くの桜の木が植えられた美しい庭があったとされ、後に桜町邸として知られるようになりました。

和歌を詠むことは宮中やその周辺に暮らす貴族たちの文化生活の中で中心的な役割を担っていました。彼らの暮らした家はほとんど残っていませんが、彼らの残した和歌は彼らの優雅な世界を垣間見る窓口となってくれます。貫之は桜の花びらが舞い散る様を雪になぞらえて、次のような精妙な歌を詠んでいます。

桜ちる木のした風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける

（拾遺集64番）

近くには中川が流れていました。中川は『源氏物語』にもたびたび登場します。「花散里」の巻で、光源氏は次のような歌を詠みます。

橘の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ